

患者の苦境 側面支援

医療部門



こども医療ネットワーク（鹿児島市）

こども医療ネットワークが南大隅町で実施した健診相談会

＝2006年2月

小児科医が全国的に不足している。なかでも離島やへき地が多い地域が少なくない。

生まれた場所で受けられる医

療の質が異なるのを見過こせない。自分たちにできることをやつ

ていこう」鹿児島大教授の河野

嘉文理事長（左）を中心二〇〇五

年九月、発足した。

小児科専門医のいない地域で、

重い病気にかかつて長期治療が必要

になった子どもたちは、自宅か

遠く離れた専門病院で入院生活

を強いられる。

さらに治療費以外にも、患者の

短期外泊の費用や家族の交通費や

宿泊費など経済的負担も重くのし

かかる。子に付き添う母親と別居

が長引き、問題が生じる家庭もある

といふ。そんな苦境にある患者

と家族に手を差し伸べ、一七九年

末までに延べ六十三人へ計三百四

十円の交通費・宿泊費などを補

助した。離島を中心に県内で十七

回の健診相談会も実施。会員の医

師らがボランティアで出向き、個

別相談に応じるほか、講演会や講

2005年9月、県内の小児科医を中心約20人で発足した「重い病気を中心とした医療支援会議」が、年に一度開催される。この会議では、医療機関や自治体、行政、社会福祉機関など、さまざまな分野の専門家が集まり、地域の医療体制や政策について意見交換を行う。また、会員間での情報交換や連携強化のための活動も行われている。

河野理事長は、「この会議を通じて、病気に対する不安や疑問の解消、正しい知識の普及を目指す」と話す。08年3月末時点での会員は17人、法人賛助会員は18社・団体。

習会も開いている。

さらに07年7月、鹿児島市福

祉子丁目に「鹿児島アミーハウス」を開設した。治療中の子どもや家族が一泊二日で宿泊できる

施設で、一年余で延べ百五十六組が利用している。

これらの側面支援の試みを医師が自主的に担っている団体は全国でもまれで、その活動資金は会員による調査、年会費や寄付が頼り。河野理事長は「多くの人のサポートがあるからこそ今までここまでこられた」と感謝する。

離島や重い病気の子どもたちだけでなく、「すべての子どもたちに適切な医療を提供したい」というメ

ンバーの思いは熱い。「社会全体が将来を担つ子どもたちの健康を守つ」という土壌をつくっていかたい」と意気込んでいる。

第59回南日本文化賞 受賞者の横顔

第五十九回南日本文化賞の受賞者に二個人の団体が決まった。環

境部門の田川日出夫氏（むち）・鹿児島大学名誉教授、周久良環境文化

センター長は、植物生態学を研究する一方、地球温暖化防止のため植林活動を実施。「みどり遺唐使」の团长として一九九〇年から中国に渡り、緑化ボランティアを行った。民営芸能部門の桑地俊

造氏（じゅうぞう）奄美の唄者（うたわら）は、一九七一年から島唄・三味線を学び、九年には奄美で初めて日本民謡大賞を受賞した。世界各地の舞台で活躍し、島唄の伝承・発展に努めている。医療部門のこども医療不

ツワーク（鹿児島市、河野嘉文理事長）は、県内の小児科医らが結成した特定非営利活動法人（NPO法人）。離島やへき地に住む

病児や家族の負担を減らすため、宿泊所開設や支援会員料、健康相

談会を行っている。芸術振興部門の鹿児島交響楽団（鹿児島市、堅

山博美理事長）は、設立三十五年を迎えたアマチコアーケストラ。二〇〇三年には社団法人化を実現し、イタリア・ナポリのサンカル

ロ劇場で初の海外公演を成功させた。贈賞式は十一月一日、鹿児島市の城山観光ホテルである。